

初めて手縫いを学ぶ小学生に向けた指導方法の考察

— 大学生の知識・技能の実態分析から —

宇野 妙恵*・雙田 珠己

A study on teaching methods for elementary school students learning hand sewing for the first time :

Based on the analysis of hand sewing knowledge and skill of university students

Tae Uno and Tamami Soda

(Received September 29, 2017)

The purpose of this research was to clarify the level of university students' hand sewing skills and knowledge, and to examine the retention of the learning up to the high school. Moreover, teaching contents necessary for elementary school students to acquire hand sewing skills are also considered. This research was composed of a questionnaire on hand sewing knowledge, a questionnaire on the memory of courses and confidence in skills, a practical examination to evaluate hand sewing skills and a survey of the actual state of basic skills such as how to handle a needle and cloth. The research was conducted on 417 university students, 209 men and 208 women, the survey being conducted in June and December 2015, and in June and November 2016. The following results were obtained: 1) There were many items regarding which the students only half understood regarding hand sewing knowledge. The problem in the questionnaires was a low response rate and a low percentage of correct answers. 2) The evaluations for hand sewing skills were significantly higher for women than for men with ball knots, ball beads, plain stitch, half backstitch, and back stitches. Around 10 percent of all students could not sew a half backstitch, a backstitch or a hem stitch. 3) About half the students could not sew a straight stitch. Moreover, about half the students could not hold cloth suitably to perform a plain stitch. It was found that students who could hold cloth correctly were able to perform a straight stitch. 4) Furthermore, basic skills such as how to handle a needle and cloth were found to be related to the skill evaluations.

Key words : plain stitch, hem stitch, back stitch, half backstitch, university students, straight stitch

I はじめに

江戸時代から女性が身に付けるべき技能として重視されていた『裁縫』は、明治時代以降、主に女子教育として取り扱われてきた。しかし、昭和22年制定の教育基本法にもとづき発行された学習指導要領により、家庭科は従来の女子のための家事・裁縫教育から一変した。小学校5・6年生では男女必修「家庭科」に、中学校は男女選択必修の「職業科」、高等学校では、共学選択「実業科（家庭）」となった（西之園ら2000）。その後、産業や経済の発展や国際化など社会の変化にともない、学習指導要領の改訂が繰り返され、その時代や社会に求められる教育が行われてきた。

特に、平成元年の学習指導要領の改訂により、中学校家庭科の被服領域は選択となり（文部省1999）、平成10年度の改訂では小学校家庭科の授業時間数が大きく削減された（文部科学省2008）。この頃から、小学校被服製作の題材は、「生活に役立つ物の製作」となり、袋や小物作りが中心となっていく。

一方、既製服の普及などにより、家庭で日常着を製作する人は少なくなった。そのため、子ども達が家庭内で家族が裁縫をする様子を見たり、家族に教わり実際に布を縫ったりする経験も少なくなっている。このように、学校と家庭の両方で裁縫を行う機会が減少したことは、近年の若者の縫製技術の低下や、手縫いの技能の低下とかかわりが深いと考えられる。

著者らが観察した小学校5年生の最初の被服実習で

*熊本大学大学院 教育学研究科

は、初めて針と糸を持つ児童が多く、教師は玉結びやなみ縫いといった手縫いの方法だけでなく、裁縫道具の説明や使い方から指導する必要があった。複数の授業者から、「限られた授業時間の中で、手縫い技能の定着を目指すのには限界がある」といった意見も得ている。このような現状に鑑みると、製作の基本となる手縫い技能の定着には、効果的な指導方法の検討や、教材開発の必要性が考えられた。

本研究室では、今まで大学生を対象に、手縫い技能の習得状況を調査してきた(福山 1997, 吉永 2013)。その結果、縫い方が間違っている人や、正しい待ち針の打ち方、布の持ち方、針の進め方といった基礎基本が定着していない人が、常に一定数存在するという知見を得ている(吉永 2013)。しかし、布の持ち方や針の進め方といった基礎基本の実態を明らかにした先行研究は少なく、その重要性は説かれていても、技能の定着と基礎基本の関係を定量化して検証した研究はほとんどない。

そこで、本研究は、小学校から高等学校まで家庭科を履修してきた大学生を対象に、手縫い技能の習得状況を把握する。また、布や針の扱い方の定着の事態を明らかにすることで、基礎基本の定着が、手縫い技能の定着や作品の出来栄に影響するのかを分析する。

さらにその結果をもとに、児童が初めて針と糸を持つ小学校で、被服製作の土台となる手縫い技能の定着を目指し、曖昧になりがちな基礎基本を丁寧に取り扱う必要性を検証する。そのうえで小学生に向けた手縫い技能定着のための効果的な指導方法を提案したい。

II 方法

本調査は、熊本大学2年次学生(年齢19～22歳)を対象に、2015年6月と12月、2016年6月と11月の4回に分けて、4つの調査を行った。各調査の実施状況と対象者数の内訳を表1に示す。また、属性として、すべての調査で性別、年齢、居住形態(一人暮らし、実家暮らし、シェアハウス、寮、下宿)をたずねた。ここでは、シェアハウス、寮は一人暮らしに、下

表1 調査人数

	2015年		2016年		人数	
	6月	12月	6月	11月	合計	(男子 女子)
(1) 手縫いの基礎知識	○	○	○	○	306	(149 157)
(2) 履修の記憶・技能の自信	○	○	○	○	412	(205 207)
(3) 布と針の扱い方の実態			○	○	223	(109 114)
(4) 手縫い技能の測定			○	○	223	(109 114)

実施した調査を○で示す。

宿は実家暮らしに分類した。その結果、一人暮らしが61.9%を占めており、実家暮らしは38.1%であった。

(1) 手縫い知識定着度のアンケート調査

小学校の家庭科被服領域で学んだ手縫いに関する知識の定着の実態を把握するために、対象者306名に質問紙によるアンケート調査を行った。調査は、小学校家庭科の教科書に記載されている手縫いの基礎的な知識についてたずねた。調査項目は、1. 縫い物をする時の正しい姿勢と布の持ち方(正しい布の持ち方、自分の持ちやすい布の持ちかた)、2. 糸について(なみ縫い時の糸の取り方・なみ縫い30cm時の糸の長さ)、3. 「わ」の名称、4. なみ縫い時の針の進め方と縫い目一目あたりの大きさについてである。

なお、回答の方法については、2. 糸の取り方では「一本取り」「二本取り」の図を提示し、それぞれの名称を答えさせた後、なみ縫い時に適切な糸の取り方を選ばせた。3. 「わ」では、「わ」の図を示し適切な名称を答えさせた。それ以外の項目はすべて択一式で回答させた。

また、布の持ち方について、「正しい布の持ち方」と「自分の持ちやすい布の持ち方」をクロス集計した。

(2) 履修の記憶と技能の自信の関係

吉永(2013)を参考に、対象者412名に小・中学校の教科書に出てくる手縫い6項目を選び(玉結び・玉どめ・なみ縫い・本返し縫い・半返し縫い・まつり縫い)、それぞれについて、履修の記憶(習った・習っていない・覚えていない)と技能の自信(できる・少しできる・できない)についてたずねた。また、履修の記憶と技能の自信の関係性をみるためクロス集計を行い、有意差がみられたものは残差分析を行った。

(3) 布と針の扱い方の実態調査

223名を対象に、手縫いにおける布と針の扱い方の実態調査を行った。調査は、判定員4名が対象者のなみ縫い時の布の持ち方と針の進め方を観察評価し、同時にビデオ撮影者4名が対象者全員のなみ縫いの様子を撮影し、評価と映像をあわせることでより正確に評価した。

評価基準は布の持ち方と針の進め方を、それぞれ4段階に分けた。布の持ち方は図1に示すように、なみ縫い時に布を持つか置くか、さらに、よこに縫い進めるか、たてに縫い進めるかを細かく分け、「よこに持つ」「たてに持つ」「よこに置く」「たてに置く」とした。適切な布の持ち方は、「よこに持つ」である。

針の進め方は、針を連続して縫い進めていく縫い方を「3針以上連続」「2針ずつ連続」とし、布をすくうように1目ずつ縫い進める縫い方を「1針ずつ縫う」、針を刺すたび糸を抜いて縫い進めていく縫い方を「刺

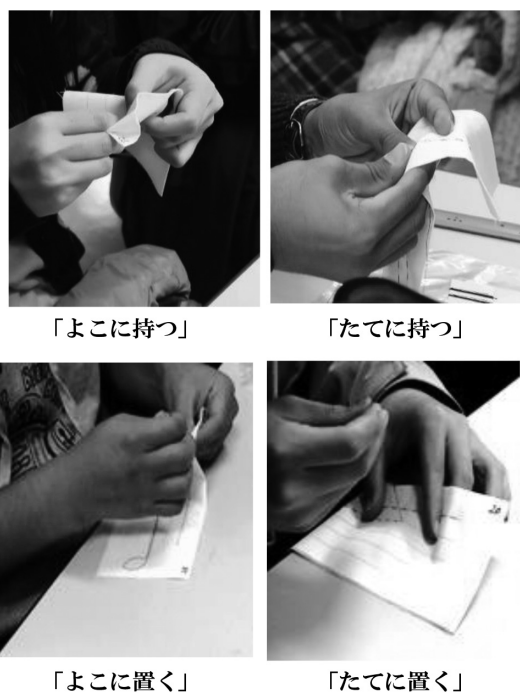


図1 布の持ち方

し縫い」とした。現行の小学校学習指導要領家庭科の解説には、『なみ縫いについては、2～3針続けて縫う程度でもよいと考えられる』（文部科学省 2008）と記載されている。そのため、「3針以上連続」と「2針ずつ連続」を適当な針の進め方とした。

また、布の持ち方、針の進め方の実態を把握した後、それぞれの男女差をみるためにクロス集計を行った。さらに、布の持ち方と針の進め方の関連性をみるためクロス集計を行った。その結果、有意差のみられたものには残差分析を行った。

(4) 手縫い技能の実態調査と作品評価

① 手縫い技能の測定

手縫い技能の定着度の測定は、223名を対象に手縫い試験において行った。試験は玉結び・玉どめ（3分）、なみ縫い（15分）、本返し縫い・半返し縫い・まつり縫い（5分）の6項目で行った。いずれの試験も、針に糸を通し玉結びを作った状態から始めた。試験に使う布（ブロード綿100%）、糸（シャッペスパン60番ポリエステル100%）、針（メリケン針（短針））は統一し、布にはあらかじめ横線を引かせ線上を縫わせた。評価は布施谷と高部の外観評価基準（表2）を参考に、縫った長さ、縫い目の大きさ、縫い目の揃いなどについて4段階で評価し、各項目の得点を合計し、作品の出来栄の評価（外観評価）とした。

また、対象者一人ひとりの実際に縫った長さとして縫い目の大きさのばらつきが大きかったため、比較しやすいよう先行研究（雙田 2012）を参考に換算を行い、新たになみ縫い・半返し縫い・本返し縫いの換算値を

求め、縫った長さ（換算値）とした。換算値の求め方を表3に示す。換算値は、実際に縫った長さ（実測値）と単位長あたりの縫い目の数から求め、縫い目一目は4mmを適当とした。各縫い方の単位長あたりの適当な縫い目の数は、なみ縫い30目/12cm、半返し縫い・本返し縫い10目/4cmとした。

② 手縫い技能と作品の出来栄に関する分析

手縫いの技能は、性差や生活上での経験により影響を受けると仮定し、最初に性別と居住形態について分析を行った。居住形態による技能の差をみるため、居住形態と縫った長さ（換算値）、作品の出来栄（外観評価）について一元配置分散分析を行い、有意差がみられたものは多重比較を行った。また、性差については、縫った長さ（換算値）と作品の出来栄（外観評価）を男女で比較した（t検定）。

つぎに、手縫いに関わる基礎基本の定着が、手縫い技能や作品の出来栄に与える影響を分析した。分析は、布の持ち方と縫った長さ（換算値）、布の持ち方と作品の出来栄（外観評価）について一元配置分散分析を行った。また、針の進め方と縫った長さ（換算値）、針の進め方と作品の出来栄（外観評価）についても一元配置分散分析を行い、それぞれ有意差のみられたものは多重比較を行った。

表2 外観評価の評価基準

評価項目		評価点			
		4	3	2	1
縫った長さ	なみ縫い	48cm以上	39cm以上 48cm未満	30cm以上 39cm未満	30cm未満
	半返し縫い 本返し縫い	13.6cm以上	10.3cm以上 13.6cm未満	6.8cm以上 10.3cm未満	6.8cm未満
	まつり縫い	8cm以上	6cm以上 8cm未満	4cm以上 6cm未満	4cm未満
縫い目の大きさ	なみ縫い 半返し縫い 本返し縫い	4mm以下	5～6mm	7～8mm	9mm以上
縫い目揃い	縫い全て	揃っている	やや揃っている	やや不揃い	不揃い
縫い目の深さ	まつり縫い	2mm未満	2mm以上 3mm未満	3mm以上 4mm未満	4mm以上
表目の大きさ	まつり縫い	2mm未満	2mm以上 3mm未満	3mm以上 4mm未満	4mm以上
裏目の間隔	まつり縫い	3mm以上 7mm未満	7mm以上 1cm未満	1cm以上 1.4cm未満	1.4cm以上

※なみ縫い15分、他5分の評価基準を示す（参考：布施谷・高部 2001）

表3 縫った長さの換算値計算式

なみ縫い	=	縫った長さ (実測値)	×	$\frac{12\text{cmあたりの縫い目数 (実測値)}}{30\text{目 (基準値)}}$
半返し縫い	=	縫った長さ (実測値)	×	$\frac{4\text{cmあたりの縫い目数 (実測値)}}{10\text{目 (基準値)}}$
本返し縫い	=	縫った長さ (実測値)	×	$\frac{4\text{cmあたりの縫い目数 (実測値)}}{10\text{目 (基準値)}}$

Ⅲ 結果と考察

(1) 手縫い知識定着度のアンケート調査

基礎知識のアンケート調査の結果を表4に示す。正答率が7割を超えた項目は、「(2) 30cmなみ縫いをする時の糸の長さ」「(3) 縫いものをする時の正しい姿勢」「(7) 縫い目1目の適切な目の大きさ」であった。正答率が高かった理由は、これまでの経験の中で自分が実際に縫う時に、「糸が長いと縫いにくい」「目が大きいと強度が弱くなる」というように実感し、考えたり改善したりする場面があったためと推察される。

一方、他の項目は正答率が6割以下のものが多く、曖昧な知識の人が多いといえた。また、「(1) なみ縫いをする時の適切な糸の通し方」については、小学校の時に二本取りで習った、一本取りと二本取りの違いを習っていないという人がみられ、授業内での指導内容にばらつきがあった。さらに、記述の問題に正解した人は、「一本取り」「二本取り」が約2割、(3)の「わ」に関しては1割未満と著しく少なかった。

また、「(4) 正しい布の持ち方」と「(5) 自分の縫いやすい布の持ち方」について、クロス集計をすると、自分が正しいと思っている布の持ち方が、自分の縫いやすい布の持ち方だとする人が多い傾向がみられた($X^2(9, N = 304) = 339.623, p < .01$)。

今回の基礎知識の調査項目は、手縫いや被服製作の土台ともいえる基本的な内容である。しかし、知識の定着の曖昧さや、記述式の問題において知識の定着の低さがみられた。このように知識の定着が低かった理由は、自分で体験したり、実感したりする機会が少ないことが挙げられる。

小学校の授業では、「なぜ適切な縫い目の大きさがいいのか」「なぜ適切な糸の取り方があるのか」など、児童がその理由や必要性を考えることで、より深い理解ができると考える。そのうえで、授業の中で基本事項を繰り返し確認することにより、知識の定着が図れるだろう。

(2) 履修の記憶と技能の自信の関係

手縫い技能の履修の記憶について、玉結び・玉どめ・なみ縫いは全体の9割以上の人々が「習った」と回答しており、履修の記憶が高かった。一方、半返し縫い・本返し縫いは「習っていない」「覚えていない」と回答した人が全体の約半数、まつり縫いも「習っていない」「覚えていない」と回答した人が全体の約4割みられ、玉結びやなみ縫いに比べて履修に対する記憶が低く、技能定着の曖昧さがうかがわれた。

技能の自信について、玉結び・玉どめ・なみ縫いが「できる」「少しできる」と回答した人は全体の約9割

表4 手縫いの基礎知識 (%)

質問	正	誤
(1) なみ縫いをするときの適切な糸の通し方 ①一本取り ②二本取り	61.1	38.3
(2) 30cm なみ縫いをするときの糸の長さ ① 30cm ② 60cm ③ 90cm ④ 1m 以上	78.1	21.9
(3) 縫いものをするときの正しい姿勢 ①膝の上 ②肘について ③胸の前 ④目の前	96.7	3.3
(4) 正しい布の持ち方 ①よこに持つ ②たてに持つ ③よこに置く ④たてに置く	57.4	42.6
(5) 自分の縫いやすい布の持ち方 ①よこに持つ ②たてに持つ ③よこに置く ④たてに置く	56.2	43.8
(6) 理想的ななみ縫いの縫い方 ①刺し縫い ②1針ずつ縫う ③連続縫い	56.2	43.8
(7) 縫い目1目の適切な大きさ ① 1~2mm ② 3~4mm ③ 5~6mm ④ 7~8mm ⑤ 9mm以上	75.5	24.5
(8) 一本取りの名称	22.1	77.9
(9) 二本取りの名称	22.2	77.8
(10) 「わ」の名称	4.0	96.0

(1) ~ (7) の で囲んだ選択肢は正解を示す。

で、「できない」と回答した人は1割未満であった。しかし、半返し縫い・本返し縫い・まつり縫いは、半数以上が「できない」と回答しており、履修の記憶と同様に、返し縫い・まつり縫いは技能の自信が低い人が多かった。ここに挙げた項目はすべて、小・中学校で必修の技能であるが、返し縫い・まつり縫いについては履修の記憶と技能の自信ともに低いと考えた。

さらに、履修の記憶と技能の自信の関係をみるため、クロス集計を行った(表5)。その結果、すべての項目において、1%水準で有意差がみられた。さらに残差分析の結果、履修の記憶の高い人ほど技能の自信が有意に高く、反対に履修の記憶が低い人は、技能の自信も有意に低いことが明らかになった。手縫いの際に毎回行う玉結び・玉どめやなみ縫いなど、日常生活で使用頻度の高いものは、「習った」と回答した人が多いことから、経験の多さが履修の記憶に影響すると考えられた。

また、半返し縫いや本返し縫いの履修の記憶が低かった理由として、手縫いの技能としては習うが、5年生や6年生からミシンを習うため、実際に作品の製作で用いる機会が少ないことが考えられる。しかし、返し縫いはなみ縫いよりも丈夫で、ミシン縫いに代わるものであるため、ぜひ身につけておきたい技能といえる。

表5 履修の記憶と技能の自信の関係

		技能の自信 (%)			合計 (人)
		できる	少しできる	できない	
玉結び履修の記憶	習った	72.6	20.6	6.7**	402
	習っていない	0.0	0.0	100.0	1
	覚えていない	0.0	33.3	66.7	6
	合計 (人)	292	85	32	409
玉どめ履修の記憶	習った	69.6	23.9	6.5**	398
	習っていない	0.0	100.0	0.0	1
	覚えていない	0.0	20.0	80.0	10
	合計 (人)	277	98	34	409
なみ縫い履修の記憶	習った	78.0	17.9	4.1**	386
	習っていない	33.3	33.3	33.3	3
	覚えていない	5.0	15.0	80.0	20
	合計 (人)	303	73	33	409
半返し縫い履修の記憶	習った	34.8	38.5	26.7**	187
	習っていない	10.0	26.7	63.3	30
	覚えていない	1.6	14.1	84.4	192
	合計 (人)	71	107	231	409
本返し縫い履修の記憶	習った	35.8	37.4	26.8**	179
	習っていない	9.4	25.0	65.6	32
	覚えていない	1.0	12.1	86.9	198
	合計	69	99	241	409
まつり縫い履修の記憶	習った	24.8	37.0	38.3**	230
	習っていない	13.8	34.5	51.7	29
	覚えていない	3.3	15.3	81.3	150
	合計 (人)	66	118	225	409

** $p < .01$, * $p < .05$

■は、調整済み残差が+1.96以上のものを示す。

□は、調整済み残差が-1.96以下のものを示す。

(3) 布と針の扱い方の実態調査

はじめに、布の持ち方についての結果(図2)をみると、正しく布を持てる「よこに持つ」人は223名中113名(50.7%)で、全体の約半数だった。「たてに持つ」人は63名(28.3%)と次に多く、「よこに置く」人は36名(16.1%)、「たてに置く」人は11名(4.9%)であった。針の進め方については(図3)、「3針以上連続」して縫う人が67名(30.0%)、「2針ずつ連続」して縫う人は60名(26.9%)、「1針ずつ縫う」人は57名(25.6%)、「刺し縫い」の人は39名(17.5%)で、各項目ばらつきがみられた。布の持ち方も針の進め方も、約半数の人が正しくないことがわかった。

つぎに、布の持ち方と針の進め方について、それぞれ男女差をみると、布の持ち方について1%水準で有意な違いがみられ($X^2(3, N = 223) = 23.202, p < .01$)、残差分析を行った結果、女子は布を「よこに持つ」人が多く、男子は布を「よこに置く」人が多かった。針の進め方について有意差はみられなかった($X^2(3,$

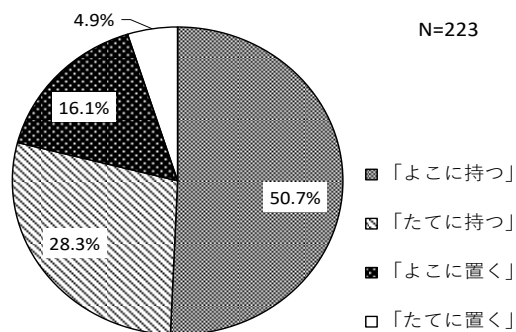


図2 布の持ち方 (%)

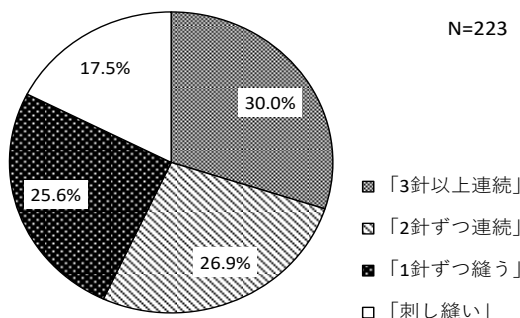


図3 針の進め方 (%)

$N = 223) = 3.103, n.s.$). この結果、針の進め方には男女差はなく、全体にばらつきがみられた。

さらに、布の持ち方と針の進め方の関係をみると、1%水準で有意な違いがみられた($X^2(9, N = 223) = 27.80, p < .01$)。残差分析の結果を表6に示すと、布を「よこに持つ」人は「3針以上連続」して縫う人と「2針ずつ連続」して縫う人が多かった。反対に、「1針ずつ縫う」人や「刺し縫い」の人は少なかった。また、布を「たてに持つ」人は「刺し縫い」、布を「たてに置く」人は「1針ずつ縫う」人が多かった。

この結果から、布の持ち方と針の進め方に関連があり、布をよこに持つ人は、連続して縫うことができる傾向がみられた。しかし、布を「よこに持つ」人で、さらに、「3針以上連続」して縫い進めることができた人に注目すると、その割合は全体の2割程度と少なく、「2針ずつ連続」して縫う人を合わせても半数以下であった。これにより、基礎基本が正しく身につけている人は少なく、基礎基本が曖昧な人が多いと考察された。現行の学習指導要領解説(文部科学省2008)に記載されている、『なみ縫いについては、2~3針続けて縫う程度でもよいと考えられる』ことをみとすためには、針の進め方だけに注目するのではなく、布の持ち方にも注目し両方を指導することが効果的であると考える。

表6 布の持ち方と針の進め方の関係

		針の進め方 (人)				合計 (人)	
		[3針以上連続]	[2針ずつ連続]	[1針ずつ縫う]	[刺し縫い]		
布の持ち方	「よこに持つ」	度数	45	37	21	10	113
		期待度数	34.0	30.4	28.9	19.8	113.0
		調整済み残差	3.2	2.0	-2.4	-3.4	
「たてに持つ」	「よこに置く」	度数	13	14	19	17	63
		期待度数	18.9	17.0	16.1	11.0	63.0
		調整済み残差	-1.9	-1.0	1.0	2.3	
「たてに置く」	「よこに置く」	度数	8	8	11	9	36
		期待度数	10.8	9.7	9.2	6.3	36.0
		調整済み残差	-1.1	-0.7	0.8	1.3	
合計	合計	度数	1	1	6	3	11
		期待度数	3.3	3.0	2.8	1.9	11.0
		調整済み残差	-1.6	-1.4	2.3	0.9	
合計	合計	度数	67	60	57	39	223
		期待度数	67.0	60.0	57.0	39.0	223.0

■は調整済み残差の値が+1.96以上のものを示す。

□は調整済み残差の値が-1.96以下のものを示す。

(4) 手縫い技能の実態調査と作品評価

① 手縫い技能の測定

手縫い試験の結果を表7に示す。玉どめ・玉結びの平均は3分間で3.1個、5分間に縫った長さ(実測値)の平均値は、なみ縫い11.9cm、本返し縫い8.2cm、半返し縫い11.5cm、まつり縫い8.1cmだった。また、換算値の平均値は、なみ縫い11.3cm、本返し縫い6.9cm、半返し縫い11.7cmで、なみ縫いと本返し縫いの長さが実測値よりも短かった。

今回の結果について各縫い方をみていくと、玉結び・玉どめは、軽く触れると糸がほどけるものや、玉結びの玉が大きすぎるもの、玉どめの玉が布から離れてできているものがあった。また、なみ縫いは、連続して縫い進めていく縫い方だが、一針ずつ縫い進めていく半返し縫いの長さとはほとんど変わらず、なみ縫いの縫った長さは短いといえた。この理由として、約半数の人が針を連続して縫えていないことや、連続縫いができる人も、慣れていなかったなど、速く長く縫えない人が多かったことが挙げられる。

さらに、返し縫いでは、半返し縫いと本返し縫いを混同している人、まつり縫いをかがり縫いで縫う人、全く縫えていない人が全体の1割程度存在した。これは、返し縫い以上の段階から間違えやすくなり、技能の定着が難しくなるためと考えられた。

また、返し縫い・まつり縫いは、「覚えていない」人や「できない」人が多かったことから、苦手意識や難しさを感じている人は多く、丁寧な指導が必要であるといえた。一方、左利きだが、左から縫い進めていく方法がわからないという人もみられたため、授業

表7 手縫い技能の結果-縫った長さ(実測値)と換算値の比較-

	実測値	換算値
玉結び・玉どめ(個)	3.1	-
なみ縫い(cm)	11.9	11.3
本返し縫い(cm)	8.2	6.9
半返し縫い(cm)	11.5	11.7
まつり縫い(cm)	8.1	-

- 換算せず

玉結び・玉どめは両方できて1個とした。

の中では、左利きの児童への個に応じた配慮も必要であるといえる。

つぎに、それぞれの縫い目についてみると、一目を4mmより小さく縫っていた人の割合は、対象者223名中なみ縫いは105名(47.1%)、半返し縫いは111名(50.0%)、本返し縫いは100名(44.8%)であった。また、まつり縫いの縫い目では、表目を一目2mmより小さく縫っていた人は108名(48.4%)で約半数を占めていた。一方、なみ縫い・返し縫いでは、全体の約3割の人が、一目5~6mmで縫っていた。これは、小学校や中学校で、一目の大きさは4~5mmで縫うと習った人が多いため、5~6mmの縫い目が多くなったと考えた。また、縫い目が4mm以下の人の中には、一目を1mmや2mmで「ぐし縫い」のように縫っている人が一定数みられた。このように細かく縫ってしまうと、布がつつたり、布への負担が大きくなり強度が落ちたりする。そのため、手縫いの指導では、適切な縫い目の大きさについて触れることが必要である。

② 手縫い技能と作品の出来栄に関する分析

手縫いの技能は、性差や生活上での経験により差が大きくみられると仮定し、居住形態と玉どめ・玉結びの数、換算値、外観評価について一元配置分散分析を行った。その結果、すべての項目において有意差はみられなかった。これは、この調査の対象者が大学2年生であり、一人暮らしの経験年数が短いため、技能習得に結びつかなかったためと考えられる。さらに、手縫い技能6項目について、玉結び・玉どめの数、換算値の平均値と外観評価の平均値を男女で比較すると(t検定)、すべての項目で有意差がみられ、女子の平均値が男子よりも高い結果となった(表8)。技能習得の男女差については、大学生(雙田2012)や高校生(香川2000)、小学生(三野ら2009)が対象の調査でも報告されている。今回の結果からも、手縫い技能の習得には、男女差が影響すると考えられた。

つぎに、なみ縫い、半返し縫い、本返し縫い、まつり縫いについて、布の持ち方と縫った長さ(換算値)、布の持ち方と作品の出来栄(外観評価)について一

表 8 評価の男女差

	性別	N	平均値	標準偏差	
玉結び・ 玉どめ (個)	男性	109	2.7	1.50	**
	女性	114	3.4	1.53	
なみ縫い 換算値 (cm)	男性	109	9.6	3.44	**
	女性	113	13.0	3.82	
半返し縫い 換算値 (cm)	男性	108	9.9	4.87	**
	女性	112	13.5	5.11	
本返し縫い 換算値 (cm)	男性	108	5.9	2.47	**
	女性	112	7.9	3.27	
まつり縫い 実測値 (cm)	男性	109	7.2	5.51	**
	女性	114	8.9	5.42	
なみ縫い 外観評価 (点)	男性	111	7.8	1.75	**
	女性	115	9.0	1.56	
半返し縫い 外観評価 (点)	男性	109	8.5	2.77	**
	女性	114	9.7	2.40	
本返し縫い 外観評価 (点)	男性	109	7.9	1.49	**
	女性	114	8.8	1.68	
まつり縫い 外観評価 (点)	男性	109	12.4	5.72	**
	女性	114	14.7	4.52	

** $p < .01$, * $p < .05$

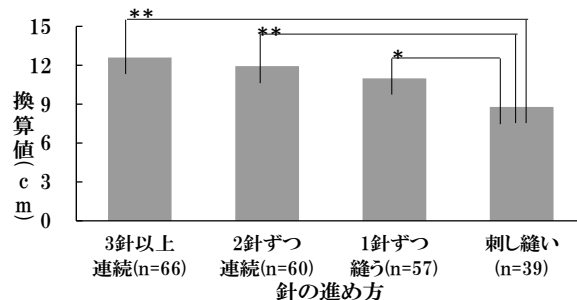
元配置分散分析を行った。その結果、すべての項目で、布の持ち方と縫った長さ、作品の出来栄に有意差はみられなかった。

また、なみ縫いについて、針の進め方と縫った長さ(換算値)、針の進め方と作品の出来栄(外観評価)について一元配置分散分析を行った。その結果、針の進め方と換算値に有意差がみられ ($F(3,218) = 8.846$, $MSe = 14.652$, $p < 0.1$)、多重比較の結果、「刺し縫い」で縫う人は、他の針の進め方の人よりも縫った長さは有意に短いことがわかった(図4)。

さらに、針の進め方と外観評価においても有意差がみられ ($F(3,219) = 6.775$, $MSe = 2.004$, $p < 0.1$)、多重比較の結果、「刺し縫い」で縫う人と「1針ずつ縫う」人は、連続縫いの「2針ずつ連続」して縫う人や「3針以上連続」して縫う人よりも、有意に点数が低いことがわかった(図5)。

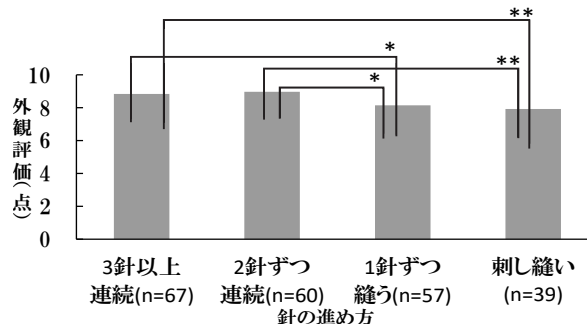
この結果から、連続して縫う方法は、「刺し縫い」や「1針ずつ縫う」といった、1針ずつ縫っていく方法よりも速く長く縫え、さらに作品の出来栄もよくなるといえた。布の持ち方や針の進め方といった基礎基本の定着は、縫う速さや作品の出来栄など手縫い技能の定着に関係していることがわかった。そのため、児童や生徒が将来自立した時に、活用できる技能を身に付けるためにも、小学校の段階で基礎基本の定着を図る必要があると考える。

本研究の結果から、技能の男女差は小学生の段階で



** $p < .01$, * $p < .05$

図4 針の進め方となみ縫いの縫った長さの関係 (N=222)



** $p < .01$, * $p < .05$

図5 針の進め方と作品の出来栄の関係 (N=223)

生じる場合もあることがわかった。しかし、手縫い技能の定着や作品の出来栄の差は、男女差だけではなく、布の持ち方や針の進め方といった基礎基本の定着の有無によっても生じることが明らかになった。

そこで、小学校における手縫い指導では、布の持ち方や針の進め方などから丁寧に取り扱うことで、効果的に手縫い技能を定着させることにつながると考える。また、ただ縫い方を教えるだけでなく、児童自身が製作実習を行う中で、用途や目的に応じて縫い方や目の大きさを変える必要性を実感し、よりよい方法を考えていくことが重要と思われる。このように児童が問題を主体的に解決しようとすることで、理解がより深まるものと期待される。さらに、縫い方を丁寧に指導し、反復練習により縫い方に慣れることが、技能定着に必要であると考えられる。そのためには、チーム・ティーチングや児童同士の教え合いなども効果的であろう。また、日常生活の中ではほとんど手縫いを行うことがなくなった現在、手縫い技能の定着を目指すため、被服の単元の授業の初めに全員で手縫いをする時間を設け、手縫いに慣れるための工夫をしている学校もみられる。手縫いの反復練習が、単純作業になるのではなく、児童が楽しみながら達成感を感じることができ、練習量も確保できるような教材の開発が必要である。

IV まとめ

- 1) 手縫いに関する知識調査で正答率が高かったものは「縫いものをする時の正しい姿勢」や「30cmなみ縫いをするときの糸の長さ」「縫い目1目の大きさ」であった。「糸の取り方」「布の持ち方」「針の進め方」については、正答率は6割未満で、曖昧な知識の人が多いといえた。
- 2) 返し縫い・まつり縫いについては、習ったことを覚えていない人や技能の自信がない人が約半数と多かった。履修の記憶と技能の自信には関係があり、記憶の高い人ほど技能の自信も高いことがわかった。
- 3) 布と針の扱い方が正しい人は、全体の約半数にすぎなかった。また、布の持ち方と針の進め方には関係性があり、正しく布を持てる人ほど、針を連続して縫い進められることがわかった。
- 4) 手縫い試験の結果、返し縫いやまつり縫いができていない人が全体の1割程度みられた。
縫い目は一目4～6mmで縫う人が多かったが、細かすぎる目や大きすぎる目もみられた。
- 5) 手縫い技能の結果、玉結び・玉どめ・なみ縫い・半返し縫い・本返し縫い・まつり縫いのすべての項目において女子のほうが男子より技能が高かった。

謝辞

本研究の調査実施にあたり御協力いただきました大津町立護川小学校の先生方および児童の皆様、熊本大学附属小学校の先生方および児童の皆様、吉永芙美乃さん、熊本大学家庭科の学生の方々に心より感謝し、ここにお礼申し上げます。

引用文献

- 福山理恵 (1989), 家庭科教育における被服製作の必要性についての研究－被服製作体験と基礎的手縫い技能の習得状況および被服の有効利用との関係から－ (平成10年度修士論文)
- 布施谷節子, 高部啓子 (2001), 家政系女子短大生における手縫い技能の実態：被服製作の知識と過去の経験との関連性, 日本家庭科教育学会誌, 43-4, 273-278
- 香川恵美子 (2000), 高校生の被服製作に関する技術・意識および効果的な指導法－全国高等学校家庭科被服製作技術検定4級を活用して－, 日本家庭科教育学会, 43, 123-129
- 文部省 (1999), 小学校学習指導要領解説 家庭編, 開隆堂出版株式会社
- 文部科学省 (2008), 小学校学習指導要領解説 家庭編,
- 三野たまき, 小口博子 (2009), 教示のタイミングが基礎縫い・作品に与える影響－小学校5年生の主観的評価と客観的評価の立場から－, 日本家庭科教育学会誌, 52-3, 174-183
- 西之園君子, 中村民恵 (2000), 戦後における小・中・高等学校の家庭科教育の変遷 (第1報)－学習指導要領における被服教育指導内容の改訂－, 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, 30, 11-29
- 雙田珠己 (2012), 大学生の基礎縫い技術の現状と課題－小学校教員免許取得希望者の場合－, 熊本大学教育実践研究紀要, 29, 69-75
- 吉永芙美乃 (2013), 大学生の衣生活における生活技術の実態と家庭科の関り－家庭科被服領域で学ぶ生活技術について－ (平成25年度卒業論文)